

Sat. Jun 12, 2021

Line A

シンポジウム | Live配信抄録 | シンポジウム

シンポジウム1

口腔機能の生理的老化と病的老化〈専〉〈日〉

座長：池邊 一典（大阪大学大学院歯学研究科顎口腔機能再建学講座
有床義歯補綴学・高齢者歯科学分野）、吉田 光由（広島大学医系
科学研究科先端歯科補綴学）

1:40 PM - 3:10 PM Line A (ライブ配信)

[SY1-1] 生理的・病的老化とフレイル・サルコペニア

○杉本 研¹（1. 川崎医科大学 総合老年医学）

[SY1-2] 加齢に伴う口腔機能低下と大脳皮質機能

○井上 富雄¹（1. 昭和大学歯学部口腔生理学講座）

[SY1-3] 口腔機能低下症・オーラルフレイルにおける口腔機能の老化の考え方

○上田 貴之¹（1. 東京歯科大学老年歯科補綴学講座）

[SY1-Discussion] 総合討論

Line B

シンポジウム | Live配信抄録 | シンポジウム

シンポジウム2

IoT・AI や遠隔機器を活用した医療・保健活動における関連用語について〈専〉〈日〉

座長：大神 浩一郎（東京歯科大学・千葉歯科医療センター）

1:50 PM - 2:50 PM Line B (ライブ配信)

[SY2-1] 口腔リハビリテーション多摩クリニックにおける

IoT・AI や遠隔機器を活用した医療・保健活動
日本歯科大学口腔リハビリテーション多摩クリ
ニックが実践する ICTを用いた教育および診療への
応用について

○菊谷 武¹（1. 日本歯科大学口腔リハビリテーション多摩
クリニック）

[SY2-2] 歯科診療行為を科学するマイデンタル AIの構築

○野崎 一徳¹（1. 大阪大学歯学部附属病院）

[SY2-Discussion] 総合討論

シンポジウム | Live配信抄録 | シンポジウム

シンポジウム3

ウィズ・コロナにおける新しい在宅歯科医療のあり方 〈指〉〈日〉

座長：佐藤 裕二（昭和大学歯学部高齢者歯科学講座）、小玉
剛（公益社団法人 日本歯科医師会）

3:00 PM - 4:30 PM Line B (ライブ配信)

[SY3-1] 「歯科訪問診療における感染予防策の指針

2021年版」策定の経緯と目的

○猪原 健¹（1. 敬崇会 猪原歯科・リハビリテーション科）

[SY3-2] 「歯科訪問診療における感染予防策の指針

2021年版」の解説

○河野 雅臣¹（1. 東京医療保健大学）

[SY3-3] 大学の立場から：歯科訪問診療の実態と課題

○菊谷 武¹（1. 日本歯科大学口腔リハビリテーション多摩
クリニック）

[SY3-4] 地域歯科クリニックの立場から：歯科訪問診療の実 態と課題 ～山梨県・山梨県歯科医師会事業の紹介～

○花形 哲夫¹（1. 山梨県歯科医師会 花形歯科医院）

[SY3-Discussion] 総合討論

シンポジウム | Live配信抄録 | シンポジウム

シンポジウム4

百寿者（centenarian）に訊く健康づくり～歯科が支 援できることを考える～

座長：渡部 芳彦（東北福祉大学 健康科学部 医療経営管理学科）

4:40 PM - 6:00 PM Line B (ライブ配信)

[SY4-1] 健康長寿のために口腔機能が果たす役割

ー TOOTH研究結果からの考察ー

○飯沼 利光¹（1. 日本大学歯学部歯科補綴学第I講座）

[SY4-2] 高齢者、百寿者の幸福感・心理的 well-beingを支え る老年的超越

○増井 幸恵¹（1. 東京都健康長寿医療センター研究所 福
祉と生活ケア研究チーム）

[SY4-3] 「8020その先」ー 多職種連携における歯科の立ち 位置の視点で考える

○岩佐 康行¹（1. 原土井病院 歯科/ 摂食・栄養支援部）

[SY4-Discussion] 総合討論

シンポジウム | Live配信抄録 | シンポジウム

シンポジウム1

口腔機能の生理的老化と病的老化〈専〉〈日〉

座長：池邊 一典（大阪大学大学院歯学研究科顎口腔機能再建学講座 有床義歯補綴学・高齢者歯科学分野）、吉田 光由（広島大学医系科学研究科先端歯科補綴学）

Sat. Jun 12, 2021 1:40 PM - 3:10 PM Line A (ライブ配信)

【池邊 一典先生 略歴】

1987年 大阪大学歯学部卒業
 1991年 大阪大学大学院歯学研究科修了
 1998年 大阪大学歯学部附属病院咀嚼補綴科 講師
 1999年 文部省在外研究員としてUniversity of Iowa (USA)にて研究に従事
 2015年 大阪大学大学院歯学研究科 顎口腔機能再建学講座 准教授
 2015年 IADR Distinguished Scientist Award for Geriatric Oral Research
 2018年 大阪大学大学院歯学研究科 顎口腔機能再建学講座 教授

【吉田 光由先生 略歴】

1991年 広島大学歯学部 卒業
 1996年 広島大学歯学部歯科補綴学第一講座 助手
 1998年 博士（歯学）取得
 2004年 広島大学大学院医歯薬学総合研究科 講師（学内）
 2008年 広島市総合リハビリテーションセンター 医療科部長
 2016年 広島大学大学院医歯薬保健学研究科先端歯科補綴学 准教授
 2019年 広島大学大学院医系科学研究科先端歯科補綴学 准教授

【シンポジウム要旨】

高齢期の機能低下の原因には、「生理的老化」によるものと、「病的老化」によるものがある。口腔機能の低下についても、原因を考察した上で、進行が不可避なもの（進行性疾患、生理的老化を含む）、機能維持可能なもの、回復も見込めるものに区別することができれば、臨床上有用である。そこで、口腔機能の老化のメカニズムを整理し、引き起こされる実際の症状との関係を理解することを目的として、基礎的研究、臨床的研究のそれぞれの専門家によるシンポジウムを企画した。

【このセッションに参加すると】

このシンポジウムに参加すると、老化やフレイル・サルコペニアの基礎知識が身につきます。「生理的老化」と「病的老化」の違いが分かります。口腔機能について、低下が不可避なもの、維持可能なもの、回復も見込めるものに区別できるようになります。診療計画の立案、目標の設定、患者と家族への説明に極めて有用な知識が身につきます。

- [SY1-1] 生理的・病的老化とフレイル・サルコペニア
 ○杉本 研¹（1. 川崎医科大学 総合老年医学）
- [SY1-2] 加齢に伴う口腔機能低下と大脳皮質機能
 ○井上 富雄¹（1. 昭和大学歯学部口腔生理学講座）
- [SY1-3] 口腔機能低下症・オーラルフレイルにおける口腔機能の老化の考え方
 ○上田 貴之¹（1. 東京歯科大学老年歯科補綴学講座）
- [SY1-Discussion] 総合討論

(Sat. Jun 12, 2021 1:40 PM - 3:10 PM Line A)

[SY1-1] 生理的・病的老化とフレイル・サルコペニア

○杉本 研¹ (1. 川崎医科大学 総合老年医学)

【略歴】

1996年 大阪大学医学部医学科卒業
1997年 桜橋渡辺病院循環器内科医員
2004年 米国カリフォルニア大学サンフランシスコ校医療センター ポスドク研究員
2008年 大阪大学大学院医学系研究科老年・腎臓内科学 助教
2013年 大阪大学大学院医学系研究科老年・腎臓内科学 (老年・総合内科学) 講師
2020年 川崎医科大学総合老年医学 主任教授

加齢とは、その良し悪しに関わらず年齢を重ねるごとに起こる過程や現象を意味する。また老化は「生理的老化」と「病的老化」に分けられるが、加齢の結果として個人差はあるものの誰にでも起こりうる変化のことを「生理的老化」、疾患や受傷により生じ、それらの合併症やお互いに重なり合うことによって起こる変化のことを「病的老化」という。

この「生理的老化」と「病的老化」により、医療だけでなく看護や介護が必要な高齢者にみられる症状のことを老年症候群と呼び、その例としてはめまい、ふらつき、倦怠感、尿失禁、もの忘れ、うつ、口腔機能低下などがある。老年症候群はともすれば「年のせい」「気のせい」「死にはしないから」と放置されがちだが、その結果不可逆になると要介護や寝たきりの原因となるため、原因となる疾患があるのか、生理的老化なのか、可逆的なのかを早期に判断することが求められる。

その判断法として有用とされるのが高齢者総合機能評価 (CGA) であり、また可逆的な状態か否かを判断するのに有用とされるのがフレイル評価である。CGAはADL、認知機能、精神状態などを一定の評価手技によって評価するもので、フレイル評価と組み合わせることにより、個々の高齢者が抱える問題点を明らかにし、必要な介入を考慮することが可能となる。

フレイルは身体的・精神的・社会的側面を有し、それらが複雑に絡み合うことによって生じると考えられている。身体的フレイルの中核をなす病態がサルコペニアであるが、サルコペニアは筋肉に特化した概念であり疾患として捉えられるため、口腔機能低下症を含め他の疾患との関連がよく検討されている。最近の研究の進歩により、フレイル、サルコペニアとも疾患の重症化や予後悪化に関連することが明らかにされ、効果的な介入に関する報告も増加している一方で、実臨床においてはこれらを適切に診断し、その結果に基づく適切な対応が実施されていないのが現状である。

本シンポジウムでは、生理的老化・病的老化が原因となる老年症候群、フレイル、サルコペニアの現状を概説するとともに、解決すべき課題について考察したい。

(Sat. Jun 12, 2021 1:40 PM - 3:10 PM Line A)

[SY1-2] 加齢に伴う口腔機能低下と大脳皮質機能

○井上 富雄¹ (1. 昭和大学歯学部口腔生理学講座)

【略歴】

1982年 大阪大学歯学部卒業
1987年 大阪大学大学院歯学研究科修了
1993年 大阪大学歯学部講師 (口腔生理学講座)
2000年 昭和大学歯学部教授 (口腔生理学講座)
2010年 日本顎口腔機能学会 会長 (~2012)
2020年 歯科基礎医学会 理事長

口腔領域は、咀嚼、嚥下、発語など多様な運動機能や唾液の分泌機能の遂行に関わる。これらの機能は、老化に伴って生じる骨格筋量の低下、骨格筋における運動神経支配の脱落、唾液腺の萎縮、感覚神経の機能低下、中枢神経系のニューロンの活動性の低下、中枢神経系の領域間の線維連絡の脱落など、様々な原因によって低下する。咀嚼や嚥下の遂行には、大脳皮質の一次体性感覚野や一次運動野、咀嚼野が開始と制御に重要な役割を果たす。口腔・顎・顔面・咽頭・喉頭の感覚が投射する一次体性感覚野とこれらの領域の運動に関わる一次運動野は、手足など他の身体部位に関わる領域に比べて面積が非常に大きい。さらに手足の場合は、例えば左側の大脳皮質が反対側である右側の手足の運動を主としてコントロールする。これに対して、口腔・顎・顔面・咽頭・喉頭の運動機能には両側の大脳皮質がコントロールに関わる。すなわち手足に比べて極めて多くの大脳皮質のニューロンが口腔・顎・顔面・咽頭・喉頭の運動機能の遂行に関与している。大脳皮質などの中枢神経系は、環境の変化によって神経回路が組み替えられる可塑性を持つ。したがって、これらの運動機能に関わる大脳皮質の感覚野や運動野のニューロンは、老化による末梢の組織や神経系の機能低下に対応してその神経回路の特性を変化させることで、老化による機能低下を代償して正常な機能に保つための余力が大きいことを示唆している。また、感覚野や運動野だけでなく、前頭前野、補足運動野も高齢者の機能低下の代償に関わることが示されている。加齢による機能低下の種類によって、これらの高次脳による代償作用が有効なものとならないものがあり、それが機能低下の予後を左右するひとつの要因である可能性が推察される。

老化による口腔機能低下の背景にある中枢神経系の変化を解析する実験は、老齢動物を使った実験の難しさから、これまで詳細な解析は進んでいなかった。私たちの研究室では、2光子顕微鏡を用いたカルシウムイメージング法や光遺伝学を応用した特定のニューロンの刺激法などを応用して、大脳皮質咀嚼野の機能に対する老化の影響、セロトニン神経系の活動による咀嚼運動パターンの変化を解析している。さらに、中枢性の機能低下が原因で生じる口腔乾燥症の病態の解明を目指して、唾液分泌の一次中枢である上唾液核ニューロンの活動をコントロールする神経メカニズムの解析を行っている。これらの研究結果の一部も併せて紹介したい。

(Sat. Jun 12, 2021 1:40 PM - 3:10 PM Line A)

[SY1-3] 口腔機能低下症・オーラルフレイルにおける口腔機能の老化の考え方

○上田 貴之¹ (1. 東京歯科大学老年歯科補綴学講座)

【略歴】

1999年 東京歯科大学卒業

2003年 東京歯科大学大学院歯学研究科修了

2003年 東京歯科大学・助手

2007年 東京歯科大学・講師

2007年 長期海外出張（スイス連邦・ベルン大学歯学部補綴科客員教授）

2010年 東京歯科大学・准教授

2019年 東京歯科大学教授

主な活動

一般社団法人日本老年歯科医学会 常任理事・専門医・指導医・学術委員会委員

公益社団法人日本補綴歯科学会 代議員・専門医・指導医・社会保険医療問題検討委員

口腔機能は、様々な機能の複合体である。咀嚼、嚥下、発音などの運動性口腔機能、唾液分泌、免疫などの分泌性口腔機能、味覚、温度感覚、食品認知などの感覚性口腔機能に大別される。これまでの歯科の歴史の中では、これらの個々の口腔機能を評価し、その治療が行われてきた。例えば、唾液分泌速度を検査して口腔乾燥症と診断したり、食品粉碎能力を検査して咀嚼障害と診断したりしてきた。

一方で、口腔機能全体の老化の有無の臨床的判断基準としては、「食べたいものを食べることができるか?」、「家族や友人と不自由なく会話することができるか?」といった点が主であろう。これは個々の機能へ

の対応というよりも、患者中心の考え方であると思う。口腔機能の老化が高齢者のフレイル予防や健康寿命の延伸へ与える影響について考える場合にも、口腔機能を1つのものとして捉える方が適しているだろう。口腔機能低下症という疾患定義が誕生したのは、このような背景からである。このように、口腔機能の老化は、その捉え方の変遷により、古くからあるようで新しいテーマであるといえる。

口腔機能低下症の定義やオーラルフレイルの考え方を見てみると、従来型の口腔機能の老化への対応は脳卒中患者や要介護者といった病的老化が中心的イメージであるのに対して、口腔機能低下症やオーラルフレイルが対象としている口腔機能の老化は、生理的老化が中心的イメージとなっているのがわかる。口腔機能低下症の診断のための検査である口腔機能精密検査では、口腔機能、特に運動性口腔機能の生理的老化の兆候をとらえるためのカットオフ値が設定されている。生理的老化であれば、可逆性のある段階で介入することで口腔機能の維持・向上をはかることが可能である。

しかし、口腔機能低下症の先にある「口腔機能の障害」レベルとの境界は、口腔機能精密検査では示されていない。これは、口腔機能低下症の定義を作成する段階から議論されているが、2016年の公表時、2018年の中間報告の時点では基準値を作らないという結論であった。これは、障害レベルの症状については、それぞれの疾患の診断基準があるためである。しかし、可逆性の失われた状態を病的老化と考えるならば、生理的老化と病的老化の境界は示されていないといえるだろう。障害レベル、すなわち病的老化の部分についても口腔機能全体としての基準値を設ける必要があるとの議論が進めば、その検討も必要となってくるだろう。口腔機能の可逆性の有無、すなわち口腔機能管理で回復する見込みがあるのかという視点から、カットオフ値の設定の議論も必要であろう。

(Sat. Jun 12, 2021 1:40 PM - 3:10 PM Line A)

[SY1-Discussion] 総合討論

シンポジウム | Live配信抄録 | シンポジウム

シンポジウム2

IoT・AI や遠隔機器を活用した医療・保健活動における関連用語について 〈専〉 〈日〉

座長：大神 浩一郎（東京歯科大学・千葉歯科医療センター）

Sat. Jun 12, 2021 1:50 PM - 2:50 PM Line B (ライブ配信)

【大神 浩一郎先生 略歴】

大神 浩一郎（東京歯科大学・千葉歯科医療センター）

【略歴】

1999年 東京歯科大学卒業

2003年 東京歯科大学大学院歯学研究科（歯科補綴(Ⅰ)学専攻）修了

2003年 東京歯科大学歯科補綴学第一講座 助手

2012年 東京歯科大学有床義歯補綴学講座 講師

2015年 東京歯科大学老年歯科補綴学講座 講師

2019年 公益財団法人ライオン歯科衛生研究所

2020年 東京歯科大学千葉歯科医療センター 講師

2021年 東京歯科大学千葉歯科医療センター 准教授

現在に至る

【シンポジウム要旨】

近年、人工知能（AI）やモノのインターネット（IoT）などのテクノロジーは目覚ましい発展を遂げており、このテクノロジーを医療現場に活用する取り組みが行われている。しかし、メディアなどで知る限りで、テクノロジー関連用語も難解に感じる者も多く、あまり身近に感じられない方も多いのではないだろうか。本シンポジウムではIoT や遠隔システムを活用した地域/ 高齢者保健と地域包括ケアシステムなど歯科医療現場で実際に活用している現場をご紹介します、テクノロジー関連の医療用語を習得し、理解のために企画を行った。

【このセッションに参加すると】

テクノロジー関連用語の基礎知識を習得できます。テクノロジー関連の医療用語の基礎知識を習得できます。IoT や遠隔システムを活用した地域の現状を説明できます。

- [SY2-1] 口腔リハビリテーション多摩クリニックにおける IoT・AI や遠隔機器を活用した医療・保健活動
日本歯科大学口腔リハビリテーション多摩クリニックが実践する ICTを用いた教育および診療への応用について
○菊谷 武¹（1. 日本歯科大学口腔リハビリテーション多摩クリニック）
- [SY2-2] 歯科診療行為を科学するマイデンタル AIの構築
○野崎 一徳¹（1. 大阪大学歯学部附属病院）
- [SY2-Discussion] 総合討論

(Sat. Jun 12, 2021 1:50 PM - 2:50 PM Line B)

[SY2-1] 口腔リハビリテーション多摩クリニックにおけるIoT・AIや遠隔機器を活用した医療・保健活動

日本歯科大学口腔リハビリテーション多摩クリニックが実践するICTを用いた教育および診療への応用について

○菊谷 武¹ (1. 日本歯科大学口腔リハビリテーション多摩クリニック)

【略歴】

1988年 日本歯科大学歯学部卒業

2001年10月より 附属病院 口腔介護・リハビリテーションセンター センター長

2005年4月より助教授

2010年4月 教授

2010年6月 大学院生命歯学研究科臨床口腔機能学教授

2012年1月 東京医科大学兼任教授

2012年10月 口腔リハビリテーション多摩クリニック 院長

東京医科大学兼任教授 広島大学客員教授

岡山大学、北海道大学、日本大学松戸歯学部、 非常勤講師

著書

『誤嚥性肺炎を防ぐ安心ごはん』女子栄養大学出版

『歯科と栄養が会えるときー診療室からはじめるフレイル予防のための食事指導』医歯薬出版

『あなたの老いは舌から始まる』NHK出版

『ミールラウンド&カンファレンス』医歯薬出版

『チェサイドオーラルフレイルの診かた』医歯薬出版

ICT (Information and Communication Technology ; 情報通信技術) の進歩により、当クリニックでは、かねてから、摂食嚥下リハビリテーションにおけるオンライン診療を発達期の患者 (永島ら、日摂食嚥下リハ会誌 2019) やミールラウンドにおいて実践してきた。COVID-19感染蔓延にあたり、受診をためらうケースが増えたため、2020年に発令された緊急事態宣言下において、オンライン診療を積極的に活用した。オンライン診療の効果の検証を目的に、傾向スコアマッチングによって対象者 (52名、平均年齢4歳) を選定し検討した。摂食機能獲得段階の変化は対面診療群、オンライン診療群ともに、初回に比べて発達段階が有意に向上していた。また、獲得段階の向上の変化に両群間の差はみられなかった。この結果、オンライン診療は対面診療と同等の効果をもつと考えられた (田村ら、日本歯科医学会プロジェクト研究報告書、2020)。

高齢者についても同様の理由により、緊急事態宣言中にオンライン診療を多く取り入れ、その実態を報告した (古屋ら、老年歯学、2021)。対象は対面診療中断となった21例 (平均年齢77歳) とした。医療職もしくは介護職の同席した「Doctor to Patient with Nurse (D to P with N)」での診療形態を行った症例は8例あった。オンライン診療中 (2か月間) に、FILSが向上した者は3名、低下した者は2名、変化のなかった者は16名であった。発熱を4名に認めたとはいえ、いずれも入院には至らなかった。体重減少率が3%以上の者はいなかった。オンライン診療に対する意識の調査を行った (古屋ら、本大会発表予定)。オンライン診療にはおおむね好意的であったが、高齢患者が使用機器の接続や機器操作について不安を訴え、デジタル・デバイドの問題が明らかになった。

また、地域において多職種連携を目的としたコミュニケーションツールを多用し患者の支援を実施してきた (戸原ら、口腔リハビリテーション学会、2016)。ここで用いるコミュニケーションツールは、クリニックの立地する人口12万人の東京都小金井市では、287アカウントが登録され、医科病院、クリニック、薬局、訪問看護ステーションなどが参加している。さらに、当クリニックでは、近隣のホスピスおよび神経専門病院と定期的に症例検討をオンラインで行っている。この場では、通常の診療情報提供書やICTコミュニケーションツールで

は、共有できない情報をより確認しあうことが可能である。

当クリニックでは、歯学部学生を在宅診療に同行する実習を行っている。感染蔓延によって、本年は、Virtual Reality (VR)画像を用いた疑似体験に置き換えた。学生からは、歯科医療スタッフと患者や家族との関係、他の職種との関係が把握できたとの意見が多く聞かれた（仲澤ら、本大会発表予定）。

ICT技術の進歩により、これまでも本領域における応用も模索されてきたが、制度上の問題もあり、迅速には進まなかった。今般の COVID-19感染蔓延により、非接触、密回避の必要性が高まる中、ICTの利用を促進することが急務と考える。

(Sat. Jun 12, 2021 1:50 PM - 2:50 PM Line B)

[SY2-2] 歯科診療行為を科学するマイデンタル AIの構築

○野崎 一徳¹ (1. 大阪大学歯学部附属病院)

【略歴】

平成13年 3月 北海道大学歯学部 卒業

平成13年 4月 大阪大学大学院歯学研究科博士課程 入学

平成16年 3月 大阪大学大学院歯学研究科博士課程 修了（博士（歯学））

平成16年 4月 大阪大学サイバーメディアセンター応用情報システム研究部門 教務職員

平成18年 4月 大阪大学大学院情報科学研究科博士後期課程 入学

平成21年 4月 大阪大学臨床医工学融合研究教育センター 特任講師（常勤）

平成21年 9月 大阪大学大学院情報科学研究科博士後期課程 修了（博士（情報科学））

平成23年 7月 ジョセフ・フーリエ大学Gipsa-Lab 客員教授

平成23年 8月 大阪大学大学院基礎工学研究科機能創成専攻生体工学講座 特任講師（常勤）

平成25年 4月 大阪大学歯学部附属病院医療情報室 助教

令和 元年 7月 大阪大学歯学部附属病院医療情報室 准教授

令和 元年 8月 大阪大学歯学部附属病院医療情報室 室長

国連がすすめる SDG s (Sustainable Development Goals)の実現と関連して、日本国においては Society5.0を目指すことが「第5期科学技術基本計画」として閣議決定（2016年1月）されている。コロナ禍以前から情報通信技術による非接触、遠隔仕事社会の発展が希求されており、IoT、ビッグデータによる生活環境デジタル化や、個人情報保護規定（GDPR）によるデジタルデータ国際流通が多くの分野で進められている。歯科医療の情報化は喫緊の課題であり、そこでマスターピースとなると考えられるのが、歯科診療室単位の視点の導入である。一般的な歯科診療室にはチェアユニットが設置されており、情報機器が必要とする電気やスペースが存在している。そこにクラウド等と接続した情報機器を設置することにより、電子カルテ機能やIoT機器からの環境センシング情報の収集と蓄積機能をチェアユニットが果たすと考えられる。

大阪大学歯学部附属病院では産学連携プロジェクトとして令和2年4月より「マイデンタル AI」プロジェクトを推進している。マイデンタル AIは、ビッグデータを蓄積する機能を備え、患者や医療従事者に寄り添う AIであり、診療中の安全安心を支援し、診療業務以外の煩雑な作業を代行しながらも、IoTデバイスを通じて歯科診療室での出来事をプライバシーに配慮しながら記録するものである。マイデンタル AIは、一般的な疾患別の AIとは異なり、様々な役割をする AIの集合体である。そのため、大量の学習用データを必要とするため、教師データの作成を手で行うことが困難である。現在、この技術課題に取り組んでいる。マイデンタル AIは、教育研究病院における歯科医師養成に際して AIによる模擬患者を用いた診療アドバイスや、自動模擬試験等に用いられることを想定している。一般臨床では、マイデンタル AIが診療状況を把握して自動的にカルテを作成し、医療従事者が内容確認を行うといった利用方法が考えられる。さらに、急な患者の状態変化を感知して切削器具を自動停止させるなどのセーフティーロック機能の実現にも役立てられる。

マイデンタル AIで収集されるデータを GDPR等に則り、オンラインで流通させることにより、患者にとっては一生涯の歯科治療履歴を観察データとして保存してもらえ、医療従事者にとっては、マイデンタル AIがチェアユ

ニットを介して適切な診療支援をえる可能性がある。マイデンタル AIが普及すれば、これまで歯科診療内容をカルテベースで解析していた段階から、より直接的な観察データを利用（一時利用）することが可能となり、診療行為そのものを科学としてとらえ、よりよい歯科医療を次世代に継承する基盤となると考えている。

(Sat. Jun 12, 2021 1:50 PM - 2:50 PM Line B)

[SY2-Discussion] 総合討論

シンポジウム | Live配信抄録 | シンポジウム

シンポジウム3

ウィズ・コロナにおける新しい在宅歯科医療のあり方〈指〉〈日〉

座長：佐藤 裕二（昭和大学歯学部高齢者歯科学講座）、小玉 剛（公益社団法人 日本歯科医師会）

Sat. Jun 12, 2021 3:00 PM - 4:30 PM Line B (ライブ配信)

【佐藤 裕二先生 略歴】

1982年：広島大学歯学部卒業
1986年：広島大学大学院（歯科補綴学1）修了・歯学博士
1986年：歯学部附属病院助手
1988年～1989年：アメリカ合衆国NIST客員研究員
1990年：広島大学歯学部講師（歯科補綴学第一講座）
1994年：広島大学歯学部助教授
2002年：昭和大学歯学部教授（高齢者歯科学）
日本老年歯科医学会 専門医・指導医，理事（在宅歯科医療）
日本補綴歯科学会 専門医・指導医，理事（広報）
日本口腔インプラント学会 専門医・指導医
日本歯科医学会 常任理事
第二種歯科感染管理者
昭和大学歯科病院ジェネラルリスクマネージャ

【小玉 剛先生 略歴】

小玉 剛（こだま つよし）
1983年 城西歯科大学（現・明海大学）歯学部 卒業
1985年 こだま歯科医院 開設
1989年 東京医科歯科大学大学院歯学研究科修了 歯学博士
1991年 東京医科歯科大学歯学部附属歯科技工士学校 非常勤講師（～2011年）
1993年 東京医科歯科大学歯学部 非常勤講師（～1997年）
2005年 明治薬科大学 客員教授（～2016年）
2013年 一般社団法人 東京都東久留米市歯科医師会 会長（～2017年）
2016年 公益社団法人 日本歯科医師会 常務理事（現在に至る）

社会歯科学会 副理事長

一般社団法人日本老年歯科医学会 在宅歯科医療問題検討委員会副委員長

【シンポジウム要旨】

在宅歯科医療は、高齢者の生活と生命を支える上で不可欠なものであり、人生100年時代へ向けて今後一層の拡充が期待される。しかし、2020年のCOVID-19の感染蔓延時には、在宅歯科医療が中断され十分に提供されない事例が多く認められ、現在の在宅歯科医療における脆弱性が一部明らかとなったとも言える。そこで本シンポジウムでは、地域性、生活の場の多様性等に配慮しながら、ウィズ・コロナ時代の感染対策にも対応した新しい在宅歯科医療の在り方を模索する。

【このセッションに参加すると】

- ・在宅歯科医療における基本的な感染対策ができるようになる。
- ・COVID-19の状況に応じた安全で効果的な在宅歯科診療が実施できる。
- ・施設の職員への「安全な口腔ケア」の指導ができる。

- [SY3-1] 「歯科訪問診療における感染予防策の指針 2021年版」策定の経緯と目的
○猪原 健¹ (1. 敬崇会 猪原歯科・リハビリテーション科)
- [SY3-2] 「歯科訪問診療における感染予防策の指針 2021年版」の解説
○河野 雅臣¹ (1. 東京医療保健大学)
- [SY3-3] 大学の立場から：歯科訪問診療の実態と課題
○菊谷 武¹ (1. 日本歯科大学口腔リハビリテーション多摩クリニック)
- [SY3-4] 地域歯科クリニックの立場から：歯科訪問診療の実態と課題～山梨県・山梨県歯科医師会事業の紹介～
○花形 哲夫¹ (1. 山梨県歯科医師会 花形歯科医院)
- [SY3-Discussion] 総合討論

(Sat. Jun 12, 2021 3:00 PM - 4:30 PM Line B)

[SY3-1] 「歯科訪問診療における感染予防策の指針 2021年版」策定の経緯 と目的

○猪原 健¹ (1. 敬崇会 猪原歯科・リハビリテーション科)

【略歴】

2005年 東京医科歯科大学歯学部卒業

2009年 同大学院顎顔面補綴学分野修了、博士(歯学)

2010年 日本大学歯学部摂食機能療法学講座 非常勤医員

2010～2011年 カナダ・アルバータ大学リハビリテーション学部言語聴覚療法学科Visiting Professorとして留学

2011年 医療法人社団敬崇会 猪原歯科医院 (現 猪原歯科・リハビリテーション科) 副院長

2015年 社会医療法人祥和会 脳神経センター大田記念病院に歯科を立ち上げ、非常勤歯科医としても勤務

2020年 敬崇会 猪原歯科・リハビリテーション科 理事長

2021年 グロービス経営大学院経営研究科修了、経営学修士(専門職)

その他現在、東京医科歯科大学大学院ならびに口腔保健学科、岡山大学大学院 非常勤講師

日本在宅医療連合学会評議員、全国在宅療養支援歯科診療所連絡会理事など

2020年初から我が国において流行が始まった新型コロナウイルス感染症 (以下、Covid-19) は、唾液を含む上気道からの飛沫により感染することから、上気道の一部である口腔を取り扱う診療科である歯科も対応を迫られた。特に Covid-19は、感染した高齢者の死亡率が高いこと、そして在宅歯科医療においては十分な感染対策を講じることが難しいことなどから、多くの歯科診療所が対応に苦慮することとなった。4月に入り、1回目の緊急事態宣言が首都圏をはじめとする地域に発出され、また各地の介護施設などでクラスター感染が報告されるようになると、個人用防護具が不足し始め、診療の縮小や休止を余儀なくされる歯科診療所も現われるようになり、演者も同様の措置を取らざるを得ない状況となった。また施設によっては、歯科訪問診療の受け入れを停止とするところも存在した。

そのような中、日本在宅医療連合学会において、歯科の内容を一部含む在宅医療における感染対策集をまとめることとなり、「在宅医療における新型コロナウイルス感染症対応 Q&A」(以下、Q&A集)として6月に公表された。また併せて同学会の第2回学術集内「新型コロナウイルス感染症対策特別企画シンポジウム1 在宅歯科医療における新型コロナウイルス感染対策のための提言作成に向けて」において、日本老年歯科医学会、日本障害者歯科学会、日本歯科医師会の各会からシンポジストが登壇し、歯科訪問診療の差し控えによる口腔環境の著しい悪化などがみられたケースが存在したこと等が報告された。それを踏まえ、①在宅歯科医療にフォーカスをあてたガイドラインの策定が急務であること、策定にあたっては医科・歯科や学会の枠を超え英知を結集して行う必要があること、またその際には日本在宅医療連合学会として協力を惜しまないこと、等が議論された。

これを受けて日本老年歯科医学会では、在宅歯科医療委員会を中心として、歯科訪問診療における感染予防策の指針の策定に向けて議論を行ってきた。この中では、いわゆる狭義の歯科訪問診療における感染対策にとどまらず、協力歯科医療機関等として関わっている介護施設等においてクラスター感染が発生した際の、施設職員に対する口腔ケア支援のあり方等についてもディスカッションを行い、記載を行っている。これは日本在宅医療連合学会 Q&A集の表現に準じ「逆タスクシフト」と称しているが、通常時であれば介護職員が行うケアを、クラスター感染発生時など感染リスクが高い状況においては、感染対策の知識と経験値の高い医療職が代行して実施し、感染拡大を防ぐ目的のものである。

Covid-19は、なかなか収束を見通せない状況が続いている。本指針が、歯科訪問診療の安全な実施に寄与することを期待している。

(Sat. Jun 12, 2021 3:00 PM - 4:30 PM Line B)

[SY3-2] 「歯科訪問診療における感染予防策の指針 2021年版」の解説

○河野 雅臣¹ (1. 東京医療保健大学)

【略歴】

1985年 静岡県生まれ

2011年 広島大学歯学部卒業

2011-2013年 磐田市立総合病院歯科口腔外科

2013-2014年 東北大学病院歯科口腔外科

2014-2019年 一般歯科医院勤務

2017-2020年 東京医療保健大学大学院医療保健学研究科感染制御学分野博士課程

2020年～ 一般歯科医院向け感染対策支援事業開始

東京医療保健大学大学院医療保健学研究科感染制御学分野非常勤講師

日本老年歯科医学会在宅医療委員会外部委員

mail: masaomikono@gmail.com

HP: <https://masaomikono.com>

2019年末、中国・武漢で初めて報告された COVID-19は瞬く間に全世界へと拡大し、今もなお拡大を続けている。わが国においても、本抄録記載時点（2021年3月末）には感染拡大の傾向にあり、歯科診療の現場も緊張が強いられている。

歯科訪問診療においては、対象となる患者が COVID-19の重症化リスクを有していることがほとんどであり、残念ながら高齢者施設等では歯科介入が困難となっているケースもあるという。また処置に際しての制約も多く、その中で安全な歯科診療を提供するための指針作成が望まれていた。

そこで、日本老年歯科医学会在宅医療委員会では、2020年11月から指針の作成を開始した。次々と発表される新しい知見を取り入れつつ、また利用可能なエビデンスも限られている中での指針作成は困難な作業であったが、現場での感染リスクを減らすための“羅針盤”となるものになったと考えている。

本日の講演では、指針の目的及び概略を解説し、「IV. 歯科訪問診療における感染予防策」「V. 安全に歯科訪問診療を提供するために」「VI. 地域の医療体制・介護体制を支えるための逆タスクシフト」について重点的に解説をする。基本的な用語の定義に関する解説は、時間の都合上割愛する予定である。事前に指針に一度目を通していただくことをお勧めする。

「IV. 歯科訪問診療における感染予防策」

歯科訪問診療であっても、基本的な感染予防策の原則は他の医療環境と同じである。しかし、歯科及び歯科訪問診療の特殊性のため、その原則に合わせるためには少なからぬ工夫や応用が必要である。本講演では、歯科訪問診療の現場でも原則からはみ出すことなく、安全に診療を行うための注意点について解説する。

「V. 安全に歯科訪問診療を提供するために」

COVID-19のパンデミック下の医療において、大きな変革が生じた領域の一つに遠隔医療がある。受診前に電話

やインターネットを用いたスクリーニングを行うなど、感染拡大を防ぎつつ医療資源を守るための試みが世界中で行われている。本講演では、歯科訪問診療の現場以外で行うべき対策について解説する。

「VI. 地域の医療体制・介護体制を支えるための逆タスクシフト」

地域で療養する要介護者の“生活”を支えているのは家族や介護職等であり、“医療”を支えているのは歯科を含む医療従事者である。例えば要介護者が COVID-19に罹患した場合、感染予防策に習熟していない家族や介護職等が生活を支えることは感染拡大を招き、医療を逼迫する恐れがある。このため日本在宅医療連合学会では、こうした家族や介護職を現場から離し、医療従事者が生活と医療を支えるという逆タスクシフトを導入し、地域医療を守る必要性があると提唱している。本講演では、歯科訪問診療に関わる歯科医療従事者が逆タスクシフトを導入する場合の注意点を解説する。

(Sat. Jun 12, 2021 3:00 PM - 4:30 PM Line B)

[SY3-3] 大学の立場から：歯科訪問診療の実態と課題

○菊谷 武¹ (1. 日本歯科大学口腔リハビリテーション多摩クリニック)

【略歴】

1988年 日本歯科大学歯学部卒業

2001年10月より 附属病院 口腔介護・リハビリテーションセンター センター長

2005年4月より助教授

2010年4月 教授

2010年6月 大学院生命歯学研究科臨床口腔機能学教授

2012年1月 東京医科大学兼任教授

2012年10月 口腔リハビリテーション多摩クリニック 院長

東京医科大学兼任教授 広島大学客員教授

岡山大学、北海道大学、日本大学松戸歯学部、 非常勤講師

著書

『誤嚥性肺炎を防ぐ安心ごはん』女子栄養大学出版

『歯科と栄養が会えるときー診療室からはじめるフレイル予防のための食事指導』医歯薬出版

『あなたの老いは舌から始まる』NHK出版

『ミールラウンド&カンファレンス』医歯薬出版

『チェサイドオーラルフレイルの診かた』医歯薬出版

2019年に発端した COVID-19感染症は、全世界に蔓延し、未だその収束が見えない中、在宅歯科医療における環境が大きく変化した。COVID-19感染の重症化リスクを持つ者は、基礎疾患を持つ者、高齢である者、なかでも呼吸器感染の既往のある者が挙げられた。これにより、通院していた基礎疾患を持つ高齢患者や障害を持つ患者が通院時や院内での感染リスクの恐れから、訪問診療への移行を求める者が増加した。また、医療施設や介護施設でのクラスターが頻発したために、当該施設への歯科訪問診療の多くは制限された。これにより、歯科診療や口腔健康管理が受けられない患者が続出し、口腔環境の悪化が懸念された。一方、同様の理由により、医療施設や介護施設に入院または入居する者に対する家族の面会が極端に制限された。人生の最終段階を迎えようとしている患者にとって、入院するということは、二度と家族や近親者に会うことができないことを意味する。この事態により、患者は最期の場所を在宅に求め、家族は看取りの場を在宅に求めた。これと同時に在宅医療を受

ける患者が急増し、必然的に歯科にも訪問の依頼が増える結果となった。COVID-19感染対策として、非接触、密の回避の有効性が叫ばれる中、訪問診療のオンライン化の必要性が高まり実践された。特に、高齢者歯科、障害者歯科分野においては、摂食嚥下リハビリテーションにおいてはその効果は高いことが確認された。一方で、社会保険上では歯科にはオンライン診療は似合わないと言われ、評価されることはなかった。歯科訪問診療下において感染症対策のための個人防護具（personal protective equipment：PPE）の運用について課題を感じた。歯科診療は飛沫を飛散させることから、感染リスクの高い行為とされ、高度なPPEが求められた。しかし、診療の場が生活の場であることや、同様に訪問する医師や看護師、介護支援専門員との防護具の違いも明らかであることから、装着に違和感を持つ患者や家族も多かった。

COVID-19の原因とされるコロナウイルスは神経親和性、神経浸潤性であることで、口腔・咽頭器官の運動障害や感覚障害をもたらした。さらに、感染による胃腸症状、下痢、腹痛、吐き気、嘔吐、食欲不振は、低栄養をもたらし、摂食嚥下機能に多大な影響を与えた。感染症からの回復後もこの影響は残り、患者のQOLを低下させた。

(Sat. Jun 12, 2021 3:00 PM - 4:30 PM Line B)

[SY3-4] 地域歯科クリニックの立場から：歯科訪問診療の実態と課題 ～山梨県・山梨県歯科医師会事業の紹介～

○花形 哲夫¹ (1. 山梨県歯科医師会 花形歯科医院)

【略歴】

昭和56年 神奈川歯科大学卒業

昭和58年 花形歯科医院院長

平成2年 神奈川歯科大学歯学博士学位修得・神奈川歯科大学非常勤講師

平成11年 山梨県介護支援専門員・指導員

平成20年 (社)勇美財団「在宅医療推進のための会」委員

平成23年 山梨県立大学 緩和ケア・認知症看護師教育課程講師、看護学特論講師
山梨県歯科医師会専務理事

平成24年 日本老年歯科医学会山梨県支部長

平成25年 日本歯科大学付属病院口腔リハビリテーション科臨床准教授

日本摂食嚥下リハ学会認定士、日本歯科医師会地域保健委員

日本老年歯科医学会 専門医・指導医

平成28年 山梨県認知症対応向上研修担当

日本老年歯科医学会摂食専門医・指導医

平成29年 山梨県地域保健医療計画在宅医療WG委員

山梨県地域包括ケア推進協議会介護予防リハビリテーション促進部委員

山梨県は東京都に隣接しているが、COVID-19感染累計患者数・死亡者数は、他の隣接県と比較すると低い水準を保っている状況である。東京都の緊急事態宣言により人の流れが抑制されたこと、県民の衛生管理、外出控え等の行動変容の効果が一因であると考えられる。

その状況下で、山梨県においても2020年4月・5月に緊急事態宣言が発令された。COVID-19感染予防を踏まえて、歯科診療所への通院患者の受診控えおよび歯科訪問診療の受け入れを断る患者・歯科がない病院・介護施設等が出てきた。

その2ヶ月間の後、歯科訪問診療を断っていた介護施設から歯科訪問診療の依頼があった。受診患者の口腔内を診ると衛生管理状態は、劣悪な状態であり、感染予防を考慮しての閉鎖的日常生活のため、口腔機能も低下傾向にあった。日頃から口腔衛生管理体制指導及び口腔衛生管理指導等を利用者及び職員対象にQ&A方式で行っていた。しかし、このような状況下では、口腔健康管理を踏まえての直接的指導が出来ない為、十分な効果を示すことはできなかった。

新型コロナウイルス感染予防において、緊急事態宣言が解除された後も、飛沫感染・接触感染を防ぐ為に社会的距離を保つことが勧められている。その為に、通常の歯科保健・医療活動が停滞しているのが現状である。この現状が続くと新型コロナウイルスによる肺炎に加えて、口腔内細菌を起因とする誤嚥性肺炎の罹患率が増加することが危惧され、オーラルフレイルおよび口腔機能低下症対策を必要とする一般高齢者・要介護者、また関わっている医療・介護・福祉関係者において、口腔健康管理（口腔衛生管理・口腔機能管理）を、日常の生活の場において理解および実施していただく必要があると考えた。そこで、山梨県歯科医師会を通して山梨県行政に提言したところ、「新型コロナウイルス感染症対策臨時事業」が認められた。

1.新型コロナウイルス感染症予防対策マニュアル（歯科）作成

「山梨県内歯科診療所が適切な感染症対策を実施できるように、感染症専門医を含めた検討会を開催し、統一マニュアルを作成し各診療所に配布する。」

2.新型コロナウイルス感染症対策臨時歯科健診実施

「外出自粛等の生活環境変化により、口腔衛生状況が低下し、感染リスクが高まっているため、臨時的な歯科健診を行い、口腔内チェック・口腔衛生指導を行う。」

3.新型コロナウイルス感染症対策口腔ケア DVD作成

「新型コロナウイルス感染症の影響で生活環境が変化する中で、高齢者の口腔機能の低下の予防、口腔ケアの充実を図るためのDVDを作成し、地域包括支援センター等を通じて普及・啓発を行う。」

この事業の実施状況、及び地域歯科クリニックの立場から歯科訪問診療の実態と課題を報告する。

(Sat. Jun 12, 2021 3:00 PM - 4:30 PM Line B)

[SY3-Discussion] 総合討論

シンポジウム | Live配信抄録 | シンポジウム

シンポジウム4

百寿者（centenarian）に訊く健康づくり ～歯科が支援できることを考える～

座長：渡部 芳彦（東北福祉大学 健康科学部 医療経営管理学科）

Sat. Jun 12, 2021 4:40 PM - 6:00 PM Line B (ライブ配信)

【渡部 芳彦先生 略歴】

渡部 芳彦

東北福祉大学医療経営管理学科・教授

歯科医師，博士（歯学）

日本老年歯科医学会 認定医・専門医・指導医

1996年東北大学歯学部卒業

2000年東北大学大学院歯学研究科（高齢者歯科学）修了 博士（歯学）

2000年東北福祉大学感性福祉研究所 PD研究員

2002年東北福祉大学 嘱託助手

2004年東北福祉大学 講師

2004-2005年 フィンランド共和国トゥルク大学歯学部 客員研究員

2009年東北福祉大学 准教授

2018年東北福祉大学 総合福祉学部 産業福祉マネジメント学科 教授

2020年東北福祉大学 健康科学部 医療経営管理学科 教授

【シンポジウム要旨】

本シンポジウムでは、百歳を超えて元気な高齢者に目を向けて、歯科が貢献できることを考える。百寿者には、若い頃からセルフケアに努めて口腔機能や栄養状態が良好な者もいれば、多数歯欠損があり義歯非使用でも食生活やコミュニケーションを楽しんでいる者もいよう。ここではいくつかの症例を通じて、その人の健康や人生を見据えた多職種連携のアプローチを俯瞰し、連携の中における歯科医療者の立ち位置について検討したい。

【このセッションに参加すると】

- ・ 高齢者の主観的健康感を理解できるようになります。
- ・ 歯科的に治癒が困難な者への、介護や支援の考え方が身につきます。
- ・ 多職種連携の基礎知識が身につきます。

[SY4-1] 健康長寿のために口腔機能が果たす役割
— TOOTH研究結果からの考察—

○飯沼 利光¹（1. 日本大学歯学部歯科補綴学第1講座）

[SY4-2] 高齢者、百寿者の幸福感・心理的 well-beingを支える老年的超越

○増井 幸恵¹（1. 東京都健康長寿医療センター研究所 福祉と生活ケア研究チーム）

[SY4-3] 「8020その先」— 多職種連携における歯科の立ち位置の視点で考える

○岩佐 康行¹（1. 原土井病院 歯科/ 摂食・栄養支援部）

[SY4-Discussion] 総合討論

(Sat. Jun 12, 2021 4:40 PM - 6:00 PM Line B)

[SY4-1] 健康長寿のために口腔機能が果たす役割

— TOOTH研究結果からの考察—

○飯沼 利光¹ (1. 日本大学歯学部歯科補綴学第Ⅰ講座)

【略歴】

昭和62年 日本大学歯学部 卒業

平成 3年 日本大学大学院歯学研究科 修了 (歯学博士)

平成 4年 日本大学 助手 歯科補綴学第Ⅰ講座

平成14年 日本大学 専任講師 歯科補綴学第Ⅰ講座

平成22年 慶應義塾大学医学部百寿総合研究センター 非常勤講師 (現在に至る)

平成27年 日本大学海外派遣研究員としてニューカッスル大学 (英国) に派遣

平成29年 日本大学 教授 歯科補綴学第Ⅰ講座 (現在に至る)

平成29年 日本大学歯学部附属歯科病院 副病院長

平成31年 日本大学歯学部附属歯科病院 病院長 (現在に至る)

新型コロナウイルス感染症は、いま人類にかつてないほどの恐怖と危機感をもたらしている。とくに、高齢世代は、自身が持つ身体的リスクにより、若年層に比べより大きな生命存続への危機を感じていると思われる。しかしその一方で、日本における100歳以上の高齢者は、2020年に8万人を突破し、8万450人となった。老人福祉法が制定された1963年での100歳以上の高齢者数は、全国でわずか153人だったことを考えると、50年余りの間に目覚ましい増加を示した。これには、医療技術の進歩や健康保険制度の充実など、科学的かつ経済的な下支えによる影響が大きいと考えられるが、加えて、高齢者個々の健康維持、増進に対する意識の向上も大きく貢献していると考えられる。なかでも、高齢者が日々の生活における運動などの習慣や、食生活を大切にしていることは、過去の疫学調査からも明らかとなっている。これらのことから、長寿が必ずしも幸せな人生に結びつくものと断言はできないが、日々の生活を大切に、健康で長生きすることは、すべての人間が共有する願いであると言える。

このような考えから、演者らは慶應義塾大学医学部百寿総合研究センターと共同で、東京在住の542人の85歳以上の超高齢者 (男性: 236人, 女性: 306人; 平均年齢±SD, 87.8±2.2年; 年齢幅, 85-102年) を対象に、健康に関する疫学調査 (The Tokyo Oldest Old Survey on Total health: TOOTH研究) を行い、その中で、お口の機能が心と身体の健康に及ぼす影響について検討した。このTOOTH研究の特徴としては、医師、歯科医師をはじめ看護、介護、心理学、経済学及び運動生理学など多分野の研究者が学際的に組織的に行ったことが挙げられる。すなわち、それぞれの研究者が得意とする内容のみならず、多くの研究分野における専門家が緊密に連携することにより、加齢にともなう超高齢者の身体的、精神的健康状態の変化さらに、経済的な状況を総合的に調査ならびに分析を行った。なお本研究は、同一対象者に同様の調査を初期調査から3年後および6年後に行い、現在も生存確認を継続して行っている。

そこで今回のシンポジウムでは、このTOOTH研究により得られた調査結果をもとに、1. 超高齢者の口腔状態の指標として残存歯数に着目して、食生活とくに栄養摂取状況を分析することにより、全身の健康との関連性を考えてみたい。また、2. 超高齢者の口腔機能として、最大咬合力の大きさに着目し、これが全身の健康にどのような影響を及ぼすかについて考えてみたい。最後に、3. 超高齢者にとり食生活がいかに重要かを考える目的で、食生活での満足度が心の健康にどのような影響を及ぼすかについて検討をしてみたい。

(Sat. Jun 12, 2021 4:40 PM - 6:00 PM Line B)

[SY4-2] 高齢者、百寿者の幸福感・心理的 well-beingを支える老年的超越

○増井 幸恵¹ (1. 東京都健康長寿医療センター研究所 福祉と生活ケア研究チーム)

【略歴】

2013年 首都大学大学院人間健康科学研究科博士後期課程修了 (博士 (学術))。2008年 (地独) 東京都健

康長寿医療センター研究所 常勤研究員（至現在）。専門分野：高齢者心理学。特に85歳以上の超高齢者層の幸福感や精神的健康の関連要因、促進要因を研究しています。特に、それらを支える心理的な発達である「老年的超越」に注目し研究を行っている。また、高齢期の健康維持に対する心理的な要因、中でも性格特性の影響についても注目している。これらの研究テーマについて、大阪大学、慶應義塾大学などと共同で、関西地区・関東地区にまたがる地域高齢者のコホートを立ち上げ10年以上に渡る長期縦断研究（SONIC研究）により、検討を行っている。

私が百寿者研究に初めて携わったのは、慶應義塾大学百寿総合研究センターの広瀬信義先生が主催される東京百寿者研究に参加した西暦2000年のことである。その時、私は百寿者の実態についてほとんど知らない状態であったので、テレビなどに登場するかくしゃくとした元気な百寿者ばかりでなく、ほぼ寝たきりで外出も十分にできない人、がんなどの大きな病気を抱えている人、近所に住んでいた昔馴染みの友人や知人も全員亡くなってしまったと言う人など、様々な困難を抱えている百寿者が多くいらっしゃることに驚いた。その一方で、百寿者へのインタビューから、問題を抱えた百寿者の多くが、大きく落ち込むことはなく、元気ハツラツとは言わないまでも、明るく穏やかな気持ちで過ごされていることを知り、百寿者における幸福感の在り方に興味を持つようになった。

このような傾向は、インタビュー調査などでの印象だけでなく、量的な研究でも確認されている。地域在住の高齢者、百寿者の調査研究からは、自立度（ADL）が低いと前期高齢者では幸福感はかなり低いが、ADLが同レベルの超高齢者や百寿者では幸福感が高いことが示されている。その理由の一つとして、百寿者やそれに近い超高齢者では老年的超越という考え方や価値観の変化が生じるためと考えられている。

老年的超越はスウェーデンの老年学者 Tornstamが提唱した概念で、高齢になって生じる①離れていても人のつながりを実感できる、②周囲への感謝の気持ちが強くなる、③ありのままを受け入れ、無理や過剰な頑張りをしなくなる、といった気持ちや価値観の変化を指す。老年的超越が高齢期以降発達することにより、身体機能が低下し、人との物理的なつながりが少なくなっても、つながりの意識を持つことができ、自己肯定が可能となり、幸福感を維持できると考えられている。我々の研究においても、身体機能が低下しても幸福感が高い超高齢者では幸福感の低い人に比べて、老年的超越が高いことが示されている。

最近の百寿者へのインタビュー研究からは、百寿者は、幸せが増すように、能動的に自分の価値観を作り上げていくことが報告されています。ある百寿者は、手の動きが不自由になり簡単な塗り絵をしていたのですが、その中に自分なりの「塗り絵とはこういうもの」というコツを発見し、その後、塗り絵が楽しみになったと述べています。若い時代や、世間一般の常識にとらわれず、自分なりの価値観を持つようになることも老年的超越の表れの大きな特徴といえるでしょう。

今回の話題提供においては、老年的超越について、①その概念と日本人高齢者における特徴、②量的な調査研究からの幸福感と老年的超越の因果関係、③歯学分野における老年的超越研究、などから老年的超越の視点から百寿者や超高齢者を理解することの重要性について論じていきたい。

(Sat. Jun 12, 2021 4:40 PM - 6:00 PM Line B)

[SY4-3] 「8020その先」－多職種連携における歯科の立ち位置の視点で考える

○岩佐 康行¹（1.原土井病院 歯科/ 摂食・栄養支援部）

【略歴】

2000年 東京医科歯科大学大学院口腔老化制御学分野 修了

東京医科歯科大学歯学部附属病院高齢者歯科 医員

2001年 聖隷三方原病院 リハビリテーション科歯科を開設

原土井病院歯科 常勤医

2020年 原土井病院 副院長，歯科部長，摂食・栄養支援部部長を兼務

臨床教授 九州大学歯学部（高齢者歯科・全身管理歯科）

非常勤講師 東京医科歯科大学（歯学部口腔保健学科）

九州大学（高齢者歯科・全身管理歯科/ 医学部保健学科）

九州歯科大学（老年障害者歯科学分野/ 総合診療学分野）

博多メディカル専門学校（歯科衛生士科）

男女別百歳以上高齢者数の年次推移（厚生労働省）によると、2020年9月1日現在における100歳以上の高齢者は80,450人となっている。さらに、国立社会保障・人口研究所の将来人口推計によると、100歳以上の高齢者は今後も増え続け、2025年には15,4000人、35年には319,000人、50年には684,000人に上ると想定されている。口腔内に目を向けると、1989年に8020運動が開始された当時の達成率は1割にも満たなかったが、2005年の歯科疾患実態調査で2割を超え、2011年の調査では4割を、そして2016年の調査では5割を超えるまでになっている。8020達成と健康長寿との関連性、あるいは、現在歯数が減っても機能歯数を保ち口腔機能を維持向上させることの効果、これらを示唆する報告は多い。このように「歯を残す」ことは健康長寿に貢献する歯科医療の果たすべき重要な役割であり、おそらく百寿者にもあてはまると考えられる。

その一方で、80歳を超えると医療・介護の必要度が急に高くなることも、また事実である。医療・介護の現場では、要介護高齢者の歯を残すことの困難さやリスクが、しばしば問題となる。また、超高齢者では義歯非使用の患者が増えてくるが、なかには義歯の使用を強く拒否する者がいて対応に苦慮することがある。このような患者が今後さらに増えると予想されるなかで、我々はどのように対応すればよいのか、未だ明確な基準はない。

そこで、本シンポジウムでは「8020その先」における歯科の役割について、百寿者の健康感や人生を見据えた多職種連携のアプローチを俯瞰し、連携の中における歯科医療者の立ち位置という視点で検討したい。まず、飯沼利光先生より慶應義塾大学医学部百寿総合研究センター85歳高齢者研究から得られた知見、特に口腔に関するものについてご講演いただく。85歳を超えてなお活動的な者と、そうではない者の特徴について知見を深めたい。次に、増井幸恵先生より老年的超越と心理的 well-being についてご講演いただく。前期・後期高齢期とは異なり、85歳以上の超高齢者においては身体機能の低下に対して心理的に適応し、心理的 well-being の維持・向上が認められるとの報告がある。歯を残すことが難しくなった者を支援するにあたっての参考となるであろう。最後に、演者が百寿者とその介護者へのインタビュー動画を提示する予定である。居宅および施設で生活されている方を候補としているが、新型コロナウイルス感染症の流行により、抄録作成時点ではインタビューが実施できていないことをお詫びする。超高齢社会を迎えて、これまで歯科医療が行ってきた、歯を残す、口腔機能を維持向上させることの重要性は増している。一方で、これらの対応が困難となった超高齢者をどのように支援していくのか、本シンポジウムがその参考となれば幸いである。

(Sat. Jun 12, 2021 4:40 PM - 6:00 PM Line B)

[SY4-Discussion] 総合討論